【特選】

稲取つるし飾り考

― 揺らぐ口承、繋ぐ願い ―

国際日本学部　歴史民俗学科２年
八木 つきの

序章

日本において「吊るす」という文化は、杉玉や提灯、注連縄、七夕飾りなど至る所で見られる。近年、手芸雑誌などのメディアで取り上げられるようになった「つるし細工」は、布で製作された細工を紐に付けて吊るす文化であり、現在では上巳の節句に飾られる物として普及している。雛壇の両脇、もしくは周囲に吊るされた細工はどれも色鮮やかであり、縫い目の見えない仕上がりからは裁縫技術の高さが伺える。つるし細工は日本の各地で見られ、なかでも、稲取（静岡県賀茂郡東伊豆町稲取）・柳川（福岡県柳川市）・酒田（山形県酒田市）は「日本三大つるし飾り」[1]として名高い。今では「つるし飾り」という総称で知られているが、各地域のつるし細工には様々な呼称があり、柳川は「さげもん」、酒田は「傘福」と呼ばれている。最初に「つるし飾り」と名付けたのは稲取であり、このことから稲取は「つるし飾り発祥の地」とされている。

筆者は、常民[2]が生活をたててゆくための生活手段である「民具」[3]について学科で学ぶ立場から、つるし細工、特に稲取のつるし飾りに見られる民具の在り方やそれらの今後の可能性を民俗学の視点から模索していきたいと考え、２０２１（令和３）年４月より文献調査を開始し、６月２６日（土）には稲取でフィールドワークを行った。

つるし細工の先行研究は、静岡県史編纂のために県内の民俗文化の究明に取り組んだ日本民俗史を専攻とする松田香代子、家政学を専攻とする三原信子、人間環境学や教育人類学を専攻とする坂元一光、柳川古文書館学芸員で歴史学を専攻とする白石直樹、１９６０（昭和３５）年頃より全国各地の雛祭りを訪れ調査を続けた藤田順子らによる一連の成果に負うところが大きい。稲取のつるし飾りを取り上げたのは松田香代子と三原信子である。松田香代子は、稲取のつるし飾りの概要や細工の一つである「猿」の意味合い、観光資源化された実態などを調査し、稲取のつるし飾りを「稲取の民俗」として扱った[4]。三原信子は、稲取のつるし飾りの概要や日本三大つるし飾りの比較、観光資源化された実態などを調査し、稲取のつるし飾りを伝統工芸品として位置付けた[5]。坂元一光は、さげもんと傘福を教育の視点から取り上げ、つるし細工が女性の教養や地域学習にどのような効果をもたらしたのか、といった点を探った[6]。白石直樹は、さげもんの概要や衰退と発展の過程を述べた[7]。藤田順子は、日本全国のつるし飾りを調査し特徴を見出した[8]。

以上の先行研究から、民俗学の視点は松田香代子に限られる。よって、つるし細工を「民具」として捉えた本稿の位置づけは初の試みである。

宮本常一『民具学の提唱』[9]では、常民の生活文化や技術を探る際、民具は重要な手段になり得ると考えられている[10]。また、「アチックミューゼアムソサエティ」（現在の神奈川大学日本常民文化研究所）を設立した渋沢敬三は、民具からはそれらを使用してきた祖先の心の美しさを感じることができ[11]、それぞれの民具を比較することで製作の創意工夫が見えてくる、と示唆している[12]。

これまでの民具研究には、紀年銘や古文書といった文字資料も取り入れられてきた。しかし、つるし細工にはそれらが全く見られないことから、本稿では口承で伝えられた技術や民具に込められた思いを

強調させるために、つるし細工を「口承民具」として定義する。まずは民具として捉えて見えてくる要素を明らかにし、次に口承民具であるからこその民俗性、さらにはそれらに対する向き合い方を示していきたい。

なお、本稿では「つるし飾り」は稲取の民具であると示すため、細工を吊るして飾る形態を「つるし細工」という総称で記す。ただし、「日本三大つるし飾り」の名は、当初からつるし飾りという語句を使用していたため表記は変えずに記すこととする。

第２章　民具としてのつるし細工

つるし細工を民具として捉えた場合、それらにはどのような要素が見出せるのか[13]。まず、現在は上巳の節句の飾りとして知られているつるし細工だが、それらは「吊るす」という形態をとっている。しかし、上巳の節句で最も重要となる雛人形は雛壇に置かれている。であるならば、なぜいくつもの細工を紐に付けて吊るす飾りが生まれたのだろうか。吊るすという行為の意味合いを明らかにし、さらに「常民性」という観点から「日本三大つるし飾り」の概要を見ていきたい。

１．稲取（静岡県賀茂郡東伊豆町稲取）のつるし飾り

稲取のつるし飾りに関しては、松田佳代子「ツルシの民俗－伊豆稲取の「雛のつるし飾り」－」[14]・三原信子「つるし飾りについての考察：雛のつるし飾りの復活と今後」[15]が先行研究として重要であるため、こちらの調査をもとにまとめていく。

稲取は、静岡県賀茂郡東伊豆町の中心街である。伊豆東岸の最大の漁港として栄え、１９５５（昭和３０）年代頃からは東伊豆の温泉郷の一画としても知られている[16]。

この地域には、上巳の節句に根付いたつるし飾り【写真１】がある。確かな文献が残っていないため風習の起源を明確に示すことは叶わないが、現存している物から、江戸時代後期にはつるし飾りの製作が行われていたことが推測されている。

上巳の節句では主に雛人形が飾られ、女児の厄を

【写真 1】稲取のつるし飾り（絹の会）
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

払う「人型」として重宝された。しかし、雛人形はどの家庭でも用意できたわけではない。経済的余裕がない家庭では、雛人形の代わりに縁起の良い細工を吊るしていた。その例が、稲取のつるし飾りである。

つるし飾りの細工は、着物の端切れを利用する。古い布を使用することによって、家族の歴史や思い出を確認する機会にもなり得た。元々は「ツルシ」「モモカザリ」「サルッコカザリ」と呼ばれ、それらからは、稲取のつるし飾りに見られる細工の原型が三角・桃・猿であったことが伺える。これら３つの基本形は、型紙を使わず容易に製作できた。三角は薬を入れる香袋である。桃は、霊力があり邪気・悪霊を払う伝承から延命長寿を意味する。サルは、厄がサル・難がサル・病気がサルというように[17]、人間の厄を請け負って身代わりになる存在である。これら以外にも、稲取には様々な種類の細工がある【表１】。多種多様な細工が生み出された背景には、稲取の娘が行儀見習いとして各地に奉公へ行った際に、裁縫の技術や文化を仕込まれて帰ってきたこと、

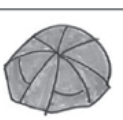
また、稲取が港町であり各地域との交流の中で裁縫技術を受容したことがあげられる。

紅白の竹の輪に細工を吊るしていくが、細工を奇数個吊るすという謂れはあるものの、吊るし方は自由である。平均的には、１組に３０～６０個、２組で６０～１２０個の細工を吊るす。１００個以上の細工を製作するとなれば、到底一人の女性で完成できるものではない。戦前は、女児（長女）の誕生を知って、親戚や近所の女性が初節句に向けて各々製作した細工を持ち寄り、つるし飾りを用意していたのである。

このように造られたつるし飾りは、その女児が7歳になった時、もしくは嫁入りした際に小正月のドンド焼き[18]で納められるのが一般的であった。

なぜドンド焼きで納めるのだろうか。この事象には、稲取を有する東伊豆町の信仰が関係している。この地域には、ドンド焼きと深く結びついた道祖神信仰が濃厚に分布している。ドンド焼きは、子供が無事に育つように守り神として大切にされた道祖神を祀る日に行われ、女児の形代であるつるし飾りは成長とともに焼き払うのが習わしであった。そのため、稲取には現存するつるし飾りが少ない。

以上、稲取のつるし飾りの概要を述べてきたが、柳川と酒田ではどのような特徴が見られ、稲取とはどのような点が異なるのだろうか。

細工	謂れ	細工	謂れ	細工	謂れ
三角	香袋 香は薬	桃	邪気悪霊退治、延命長寿	猿	厄・難・病気が去る
猿	厄・難・病気が去る	座布団	早くお座りできるように	草履	足が丈夫になるように
唐辛子	悪い虫がつかないように	巾着	お金に困らないように	這い子人形	這えば立て、立てば歩め
雀	晴れ着の帯結びは福良雀	瓢箪	6つで無病息災	枕	寝る子は育つ
蛤	良い主人に出会えるように	三番兜	舞った後は健康になる	太鼓	悪を払い福を呼ぶ
達磨	七転び八起き	お手玉	遊び道具	 ほおずき	女性の厄払い、疳の虫封じ

細工	謂れ	細工	謂れ	細工	謂れ
蜜柑	滋養	柿	滋養、長寿	花	綺麗でかわいく
梟	福・不苦労	亀	長寿の象徴	俵ねずみ	ネズミは金運や霊力がある
兎	赤い目に呪力がある	蝶	蝶のように綺麗に愛らしく	鳩	鳩はむせない
金目鯛	稲取名産の縁起物	おかたごろ	着せ替え人形		
犬	安産	松	夫婦和合	梅	貞節の正しさ
糸巻き	裁縫技術の向上	よだれかけ	赤いよだれかけは疱瘡除け	隠れ蓑	身を守り願いを叶える
竹	生命力	大根	毒消し	てるてる坊主	布で作った人型
豆	達者で息災で	茄子	花にはすべて実がなる	海老	長寿
にんじん	滋養	鶴	長寿	手毬	遊び道具
にわとり	早起きは三文の徳	花かんざし	頭痛治療のまじない	南天	難を転じて福となす
七宝	七種の七宝				

【表１】稲取に伝わる細工

１９９３（平成５）年につるし飾りが再興された際、稲取に伝わっている細工が記録された（第３章にて記載）。表中の写真の細工は、筆者が所有するつるし飾りを撮影したものである。図示された細工は、筆者が作図した。写真・絵が共に無い物は、文字だけで表に示している。なお、【表１】は稲取で配布されているパンフレットを参考にした[19]。

2．柳川（福岡県柳川市）と酒田（山形県酒田市）のつるし細工

柳川のつるし細工に関しては、坂元一光「ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸活動－柳川さげもん調査予報－」[20]「柳川さげもん民俗誌－手芸コミュニティと民俗技術の創造的継承－」[21]に依拠しつつ概観する。

柳川は福岡県南部に広がる筑後平野の西南端に位置し、南は有明海に面している[22]。

この地域に「さげもん」【写真２】と呼ばれるつるし細工がある。さげもんは柳川の方言で「提げるもの」を意味する。他にも、サゲモノ・サゲマリ・ツリビナ・マツリビナとも呼ばれる[23]。

柳川のさげもんの歴史は、江戸期に富裕層の女性によって造られていた「裁縫お細工物」と呼ばれるちりめん細工に由来する。戦後、生活様式の変化によってこの風習が廃れた後、地域文化として改めて注目されたのをきっかけに一般女性の参加が見られた。これには、「柳川市私立杉森高校」においてちりめん細工が裁縫実習として取り入れられ、基礎的な技術が広く婦人に伝えられた経緯がある。

さげもんは、ハレの日の贈答用・飾り付け用の祭具として、嫁側の母親や祖母が手造りで準備する物であった。女児の初節句に向けて、節句の一か月前から飾り始める。元々は富裕層の手で造られていたためか、さげもんは非常に華麗である。伝統的な「柳川鞠」と「ちりめん細工」から構成され、各ちりめん細工には金紙が貼られることもある。細工の謂れは主に、縁起物・子供の成長を祝うもの・幸せな結婚生活を願うものに分類される。

酒田のつるし細工の特徴は、坂元一光「伝統を創造する女性たち－酒田の傘福復興事業と地域学／地元学－」[24]に依拠しつつ概観する。

酒田は、山形県北西部の庄内地域（酒田市・鶴岡市・三川町・庄内町・遊佐町）に位置し、東は出羽山地、西は日本海、南は朝日山地、北は鳥海山に面し、山と海に囲まれた広大な平野である[25]。

この地域には、「傘福」【写真３】と呼ばれるつるし細工がある。和傘の縁に短い幕を垂らし、傘の骨

【写真２】柳川のさげもん
（筆者撮影 2021 年６月 26 日）

【写真３】酒田の傘福
（筆者撮影 2021 年６月 26 日）

に細工を吊るす形から、傘福という名が付けられたと考えられている。現在のように上巳の節句で盛大に飾られるようになったのは、「酒田商工会議所女性会」によって酒田の地域文化が再構築された時からである。

傘福の細工は、祈願系・祭礼系に分類される。祈願系に関しては、五穀豊穣・無病息災・延命長寿・夫婦和合・子宝・健康を祈る祭具であり、これらは寺社へも奉納された。例として、１９７０（昭和４５）年に皇大神神社に奉納された傘福には、日の丸や戦車、鉄兜などの細工が見られる[26]。祭礼系に関しては、山形の祭祀である「山王祭り」に据えるために造られたものであった。また、それらのミニチュアが地主や豪商といった富裕層の旧家から見つかっていることから、富の象徴として職人に造らせていたことも明らかになっている。

３.「吊るす」民具

松田香代子は、「稲取の古いツルシ[27]にくくり猿が多いということは、くくり猿にこそツルシの意義があると考えてもよさそうである」[28]と述べている。しかし、つるし細工を民具と捉える本稿の位置づけから見れば、「吊るす」という行為にこそ、つるし細工の意義があると考えることができる。

松本（長野県）には、吊るすという形態を見せる七夕人形がある[29]。家を厄から守り女児の成長を祈るために軒下に飾られ、吊るされた七夕人形は浄と不浄の結界を張る役目を負っている。これは、七夕人形と同様軒下に飾られる「くくり猿」が軒守の存在であることと類似する[30]。また、中村浜（新潟県胎内市）では七夕祭りの際に、道を横切るように縄が張られ、そこに人形や三角、猿の飾り、輪に千羽鶴を吊るした飾りを吊り下げる事例も見られる[31]。

このような事例と合わせて、改めて「吊」という漢字に着目してみると、これには「つるす・望みの位置に保つ[32]」「高くかけ渡す[33]」という意味があり、元は「弔」の俗字であったことがあげられる。「弔」には「(神･霊が）いたる、来る[34]」という意味も含まれており、これらに依拠すると、吊るすという行為には「高くかけ渡すことで境界を生み出す」「依り代となり厄を祓う」といった解釈も可能なのではないか。「置く」のではなく「吊るす」からこそ、つるし細工は信仰性をも内包した民具として捉らえることができる。

４．つるし飾りの常民性

稲取・柳川・酒田の３地域を比較すると、上巳の節句で飾られるという点では共通するが、民具の起源を探る上では相違が見られる。柳川のさげもんは担い手が富裕層の女性であったこと、酒田の傘福は寺社への奉納や祭祀に据える目的で製作されていたことから、常民の生活に根差した民具とは考えにくい。それに対して稲取のつるし飾りは、常民が暮らしの中で純粋に女児の成長を祝い願うために製作されてきたため、柳川や酒田とは一線を画す民具といえるのだ。この点から、稲取のつるし飾りには、序章にも記した「常民の生活文化や技術を探る」という民具の価値が大いに反映されていると捉えることもできよう。

第３章　「口承民具」としてのつるし飾り

前章ではつるし細工を民具と捉え、それらに見られる信仰性や、つるし飾りにおける常民性を明らかにした。本章では、つるし細工を口承民具と捉え、「口承で紡がれる民具が現在どのように継承されているのか」という実態に迫っていく。なお、本章以降は２０２１（令和３）年６月２６日（土）に稲取で現地調査を実施して得た見解も含め、論を進めていきたい。

稲取では、戦前までどの家庭でも行われていたつるし飾りの製作を再興させようと、１９９３（平成５）年、稲取婦人学級によって手芸講座で復元製作が始まった。その後、１９９８（平成１０）年には稲取温泉旅館協同組合が観光の目玉として「第１回雛のつるし飾りまつり」を開催し、２００１（平成１３）年には「第２回静岡観光大賞」を受賞した。このような稲取におけるつるし飾りの実態は、既に先行研究でも示されている[35]。

しかし、稲取のつるし飾りの実態に「常民」や「口承」の要素を求めるのであれば、「絹の会」という

製作体験の場や、地元住民の声に主軸を置く必要がある。よって、ここでは絹の会に所属する森幸枝氏（代表）（１９４６年生まれ）・森年永氏（１９４７年生まれ）・小野妙子氏（１９５６年生まれ）、また、つるし飾りを製作する地元住民より鈴島節子氏（１９３７年生まれ）に協力を仰ぎ、口承民具の継承の在り方に迫っていきたい。なお、「雛のつるし飾りまつり」も稲取のつるし飾りの実態に含まれるが、本稿では観光資源化されたことを「口承民具の今後の在り方」として捉えるため、柳川と酒田の事例と共に第４章で触れることとする。

１．絹の会の口承

絹の会は１９９３（平成５）年から活動している独立した民間団体であり、稲取でつるし飾りの製作体験を行う唯一の場となっている[36]【写真４-５】。

【写真 4】絹の会外観
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 5】絹の会内観
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

やはり裁縫ということで女性の参加がほとんどだと思われたが、女性と共に訪れた男性も製作体験に参加する例が多く見受けられる。森年永氏も１０年程前に森幸枝氏によってつるし飾りの世界に引き込まれたそうだが、つるし飾りについての歴史や製作方法を学ぶ姿には造詣の深さを感じた。

絹の会を始めて以来、参加者の多くが「こんな小さい町にこんないいものがあったのか」と口にするという。「小さな田舎町で、お母さん、おばあちゃん達の仕事になったというのは大きなことですよね」と言うとおり、女性の仕事の一つとして、つるし飾りの文化が地域の中で認められてきた功績は大きく、その認識が現在まで引き継がれ絹の会の活動に繋がったと考えられる。

絹の会では、つるし飾りを製作し、それらを商品として日本各地に伝えていく活動が行われている。素朴に女児の成長を願うだけの民具を商品にしてしまうことに、抵抗はなかったのだろうか。実際、絹の会はつるし飾りに経済性を持たせることを、伝統を残すために必要な意義のある手段だと捉えている。「ある程度の基準を保った商品を残さないと、滅びるでしょうね」という言葉からは、単なる経済活動を超えた考えを絹の会が抱いていることが強く伝わってくる。商品にするためには必然的に見映えがよいこと、技術力が高いことが求められる。これは、つるし飾りをしっかりとした土台を造った上で後世へ繋いでいくための策なのである。

つるし飾りが本来の素朴な飾りから商品へと変容したとはいえ、それらの細工に込められる願いは江戸時代後期から変わらない。「シンプルな飾りしかありません。だけど、小さい飾りに大きな願いを掛けます」。この言葉は、稲取でつるし飾りに携わってきた人々の「女児の成長を心の底から願う」思いの表れであろう。細工一つ一つは小さい物であるが、女児の母親だけでなく、血縁や地域の人々によって製作された何十、何百個もの細工に掛けられた願いはそれぞれ異なる。「夢中にはなってるけど、あんたやんなさいよ、とは言いません、何をやっているのか、お互いに干渉はしません」という風習であるのだ。地域の人々が協力して製作されるものではあったが、それは決して強制ではなく、製作したい

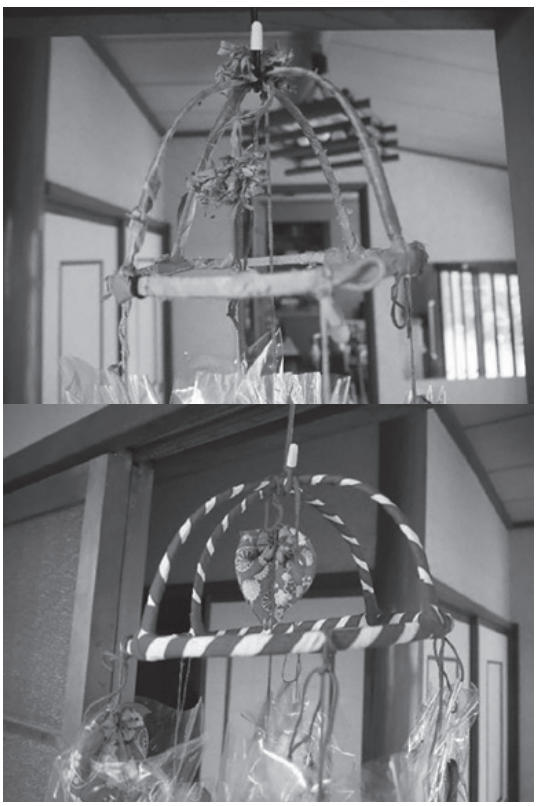
者が各々細工を持ち寄って一つのつるし飾りを完成させていたのである。これは、稲取独特の民俗性を表している。つまり、稲取の人々は、女児の成長を祝うために製作するつるし飾りに対して、自由な姿勢を貫いているのだ。造ることを強制しない。みんなで同じ物を造るでもない。技術が劣っているからといって責めるでもない。誰が何をどのように製作していても詮索しない。それは、細工に込められた願いが重要であるからだ。このような自由な向き合い方こそ、造り手の面影が強く表象される口承民具としての価値といえよう。

２．鈴島節子氏の口承

稲取在住の鈴島節子氏は、絹の会や稲取婦人学級には所属せず、個人でつるし飾りの製作に携わっている。自宅には、１９２２（大正１１）年に造られた非常に古いつるし飾りが保管されている【写真６-８】。地域の歴史や文化に詳しく、地域活動にもボランティアとして参加していた岡田善十郎氏に、「つるし飾りを造ってみないか」と声を掛けられたことをきっかけに、つるし飾りを製作するようになった。つまり、鈴島氏は口承によって得られた製作者といえる。

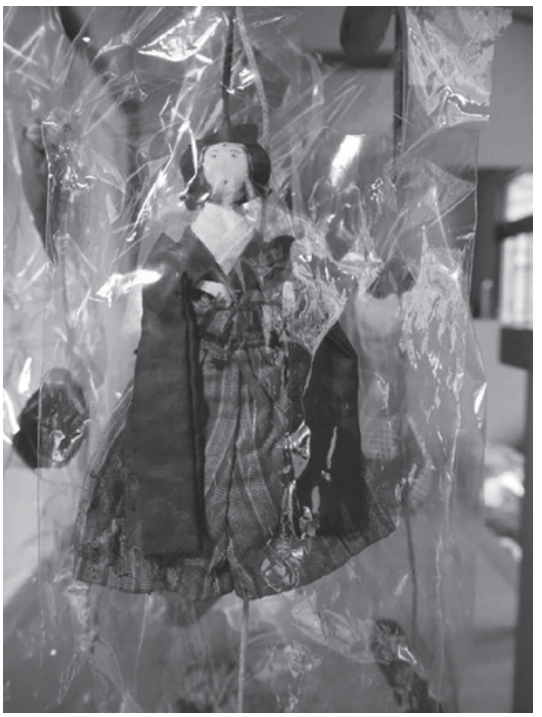
当初は細工の造り方も分からず手探りの作業であったが、「一年経ち、二年経ちやっている内に、さるっこから派生したものっていうね、こんな形にしたらこんな形になるな、っていうのが感覚で分かってきたね」と振り返るように、細工製作の要領を身に付けていった。このような鈴島氏の姿は、個人で造っているからこそ独自の特徴が生まれることを表している。

稲取のつるし飾りがお互いに干渉しない風習であることは絹の会の話からも十二分に伝わってきたが、そうであってもつるし飾りが商品となっていく変遷を鈴島氏はどのように見ていたのか。「自分がみんなに見せよう、売ろう、とかいう発想は全然なかったね」と話し、絹の会の技術力の高さには驚いたという。その一方で、「昔の家も、娘・孫のために夜なべしながら縫ったというのね、そうゆうものだから、これでいいんじゃないかなって思ったの、身構えなくても」。つまり、鈴島氏は旧来と現在のどちらの姿も稲取のつるし飾りとして認めているのだ。この姿勢からも、つるし飾りの「自由さ」が感じられ、お互いに干渉し合わないからこそ生じた多様性と捉えることができる。「稲取の人々の生活に深く根付き、各担い手が思い思いに細工を製作する」という要素をもって、つるし飾りは今日まで継承され続けてきたのだ。



【写真 6】竹の輪の比較
上は 1922（大正 11）年、下は現在一般的に見られる竹の輪である（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 7】1922（大正 11）年のつるし飾り
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）



【写真 8】現在は見られない「旦那様」と思われる細工
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

3．口承民具がもつ稲取の民俗性

つるし飾りの口承の実態を見てきたが、何かしらの媒体を介さずに口伝えであったからこそ、担い手の思いが民具に上乗せされていったのではないかと考えられる。それは、吊るすという形態や一つ一つの細工に強い祈りや厄払いの信仰性が内包されていることにも深く関係しているだろう。本章では、稲取のつるし飾りは自由さをもって継承されてきたことを提示したが、これもまた、つるし飾りが口承民具であるために生じた稲取の地域性である。仮に、つるし飾りの技術や歴史が文字媒体で記録されていたならば、それに準じようとする意識が少なからず生じ、現在のような多種多様な細工や技術の発展、各家庭で自由に製作する風習は薄れていたかもしれない。代々の担い手が、思い思いにつるし飾りを継承してきたが故に、口承民具から地域の民俗性を見出すことができたのではないか。

第４章　口承民具の行く先

稲取のつるし飾りは、「雛のつるし飾りまつり」が開催されていることから、観光資源化に力を入れていることが推測できる。それは柳川や酒田でも同様である。柳川では、「柳川まり保存会」や「柳川伝承まり・さげもん研究会」が発足[37]し、「さげもんめぐり[38]」では展示即売会・流し雛祭りなどが企画され、観光客の目を楽しませる地域の伝統工芸へと姿を変えた。これらは「生活さげもん」「土産さげもん」に分類され、特に土産さげもんは、デザイン性が追求されインテリアとしても普及していった[39]。酒田では、「酒田商工会議所女性会」によって２００５（平成１７）年８月から計１２回の講習会を設け、翌年３月までに約６千個もの細工を造り、それらを「庄内ひな街道[40]」の一つとして「酒田の雛めぐり」で展示した。これを契機に、毎年酒田では傘福の展示が行われ、同一の展示を避けるために紅花で染めた布が用いられたこともあった。学校での製作体験指導や傘福の商標登録も進み、傘福が酒

田の新たな伝統を生み出したのである[41]。

では、稲取のつるし飾りは観光化も含め、今後どのような在り方を見せていくのだろうか。また、稲取のつるし飾りという口承民具は今後どのように扱っていくべきなのだろうか。稲取温泉旅館協同組合に所属し、「雛のつるし飾りまつり」を運営する村木友香（むらきゆか）氏（１９８１年生まれ）の話から検討していきたい。

１．観光資源としての歩み

「雛の館」[42]・「雛のつるし飾りまつり」は、稲取婦人学級の活動が先駆けとなって打ち出された施策である。稲取婦人学級によって細工の謂れや型紙が明らかになったことで、稲取の人々によって製作された数あまたのつるし飾りが２００１（平成１３）年に雛の館に集まり展示されるようになった。中には、端午の節句の細工、稲取が港町であることが連想される魚や海藻などの細工、稲取が漁獲量一位を占める金目鯛の骨から造られた細工、デコシールで装飾された煌びやかな現代風の細工など、伝統から発展した様子も確認することができる【写真９-13】。雛の館は博物館施設の認定は受けておらず、稲取温泉旅館協同組合としては「観光施設」として位置付けているようだ。

「雛のつるし飾りまつり」が開催された１９９８（平成１０）年は、来館者数は１万人にも満たなかったが、雑誌やテレビといったメディアによって、県外からの注目が集まるようになり、第７回開催時に

【写真 9】雛の館内観
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 10】端午の節句の細工（雛の館）
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 11】魚や海藻などの細工（雛の館）
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 12】金目鯛の骨から造られた細工（雛の館）
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

【写真 13】デコシールで装飾された細工（雛の館）
（筆者撮影 2021 年 6 月 26 日）

は２５万人と過去最高の来館者数を記録した。「雛のつるし飾りまつり」では、つるし飾りの展示だけでなく、「雛まつり市場」にてつるし飾りの販売も行われている。さらに、「初節句を祝う会」ではその年に初節句を迎える女児の成長が祈願される。これは、稲取のつるし飾りが初節句に合わせて製作された歴史に沿った活動である。このように、「雛の館」・「雛のつるし飾りまつり」は、地域に根差した活動として継続されている【写真１４】。

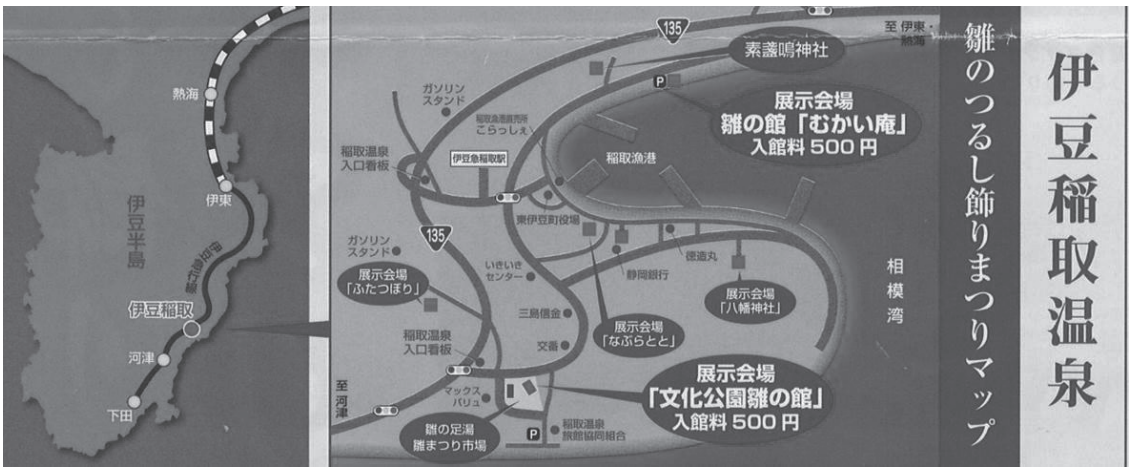
また、つるし細工には各地域との相互関係も見られた。２００８（平成２０）年からは稲取の呼びかけによって、「日本三大つるし飾りサミット」[43]が全４回にわたり開催された。稲取から始まり、２００９（平成２１）年は柳川、２０１０（平成２２）年は酒田、そして、２０１１（平成２３）年は東京で開催され、東京から全国に向けて三地域のつるし細工の情報発信を行った。本サミットでは、つるし飾りの歴史や観光事業の現状などについて意見交換が行われ、相互の連携や地域振興に向けての協力が期待された。

２．口承の危うさ

「日本三大つるし飾りサミット」が稲取の呼びかけで開催されたことは、稲取にとって今後のつるし飾りとの向き合い方を模索する重要な転換期と位置付けられるはずだったが、開催から約１０年が経過した現在も、稲取では未だにつるし飾りの大きな発展が見られない。では、なぜ稲取ではつるし飾りに関する活動が伸び悩んでいるのか。

製作方法や各細工の謂れが口伝えで継承されることや、ドンド焼きでつるし飾りを納めてしまうことは、つるし飾りの変遷を追いにくくし、発展の障壁になっていると考えられる。口承であったが故につるし飾りの実態が広く伝わらず、本来は稲取だけの呼称であった「つるし飾り」がつるし細工の総称となってしまったことはその一例である。

また、柳川や酒田のつるし細工が見た目の美を意識した「民芸[44]」へ寄ることに伴い、稲取のつるし飾りも手芸雑誌に多く取り上げられるようになり、手芸品、または、つるし細工の製作を趣味の一環として捉える感覚が浸透した。しかし、稲取のつるし



【写真14】雛のつるし飾りまつりマップ
稲取温泉旅館協同組合作成パンフレット「第24回雛のつるし飾りまつり」より
（稲取温泉旅館協同組合より掲載の快諾を頂いている）

飾りは細工に込められた常民性が最も重要視される民具である。そのため、民芸に傾倒した柳川や酒田のつるし細工や、「女性が高度な教養を身に付け文化的な教育を受けたことを保障する[45]」手芸品と同様に扱うことは、稲取の口承性の損失に繋がってしまうだろう。

３．新たな観点と口承民具としての価値の創造

では、稲取の人々は、今後のつるし飾りの在り方についてどのように考えているのか。「縫い手に、私達の仕事は文化として評価するのに値するものだから、ケチの付けられないように、みんなで頑張りましょう、と言っています」という姿勢からも伺えるように、稲取では現在つるし飾りの土台づくりに取り掛かっているといえる。しかし、稲取の人々が現在形成中の土台は「細工の技術」であり、そこに歴史的・民俗的要素を組み込んでいくことは手つかずのままである。１９９３（平成５）年につるし飾りが再興された際の、「この時でなければ、あと５年１０年経っていたら、文化は途絶えていたでしょうね」という言葉が表すように、細工の技術を後世へ伝えると同時に、「つるし飾りが稲取の口承民具」であること、すなわち、「女児の成長を心の底から祝い願う気持ちが表象された口承民具」であることも伝えていかなければならない。

柳川・酒田では、観光資源化や地域教育の観点からつるし細工に注目してきた。だが、稲取ではつるし飾りという文化を残したいという思いはあるものの具体的な観点は提示されていない。そうであるならば、常民の生活へのまなざしが重要な民俗学の観点から、改めて民具としてのつるし飾りに注目してみてはどうだろうか。

つるし飾りの地域における民具の存在意義や変遷を、現地に根差した調査によって明らかにしていくためには、口承で伝えられてきた技術や知恵、担い手の思いを着実に拾い上げることに最大限の注意を払うべきである。「自由さ」と「お互いに干渉しない」という特徴を持つ口承民具は、一軒一軒回り耳を傾けることで、詳細な特徴を見出せるのではないか。可視化された記録が無いからこそ、その地域の声が非常に貴重な資料となるだろう。つまり、現在の稲取の口承民具に求められるのは「余所者の視点」である。それが、稲取の口承民具に更なる価値を付加させ、いずれは文化財といった肩書での保護も視野に入るのではないだろうか。

終章

民具が民具として成り立つためには、誰かの心のうちにある考えを「具象化して創造」した後に、「共通の理解」が必要である。それは製品の効用を理解しているというだけでなく、創造者と同じ程度に使用者がその意匠・構造を理解していなければならない[46]。ここでは「使用者」という語が用いられているが、それは「継承者」とも考えられる。

「なんでみんな無理して造らなきゃなんなかったか。無理だったんです、朝昼晩の生活が大変な時期にね。だけど、これは、迷信じゃないけど、子供を守るものだから。おばあちゃん、お姑さんがつくんなさいって。だから慣れない嫁は旦那に励まされながら一生懸命造るわけです」と森幸枝氏は語る。子供の死亡率が高かった江戸時代後期、「子供を守るもの」として稲取の人々の信仰を集めていたのがつるし飾りであった。無事に初節句を迎えられたことに感謝しつつ、「７歳までは守ってやって下さい」「嫁入りまではどうか生かして下さい」といった願いを込めた。それだけでなく、「足が丈夫でありますように」「よく寝る子に育ちますように」「良い旦那さんに出会えますように」など、思い思いの願いがあった。それは、決して針を持つ女性だけでなく、女性の側で細工の完成を心待ちにしていた家族の面影までも感じられる口承民具であるのだ。これこそ、つるし飾りにおける「共通の理解」であり、細工の意匠や構造に内包させていくべきなのである。

だが、この「共通の理解」はいつまで持続できるだろうか。特に「口承」は実態を持たないため、地域や社会情勢の変容による影響を受けやすい。今現在、まさにコロナ禍において継承の場が失われている。口承を活かした新しい継承の場を、地域に根差した調査と共に開拓していかなければならない。

つるし飾りを取り巻く環境が常に変化している今日、つるし飾りという口承民具はどのような変容を迎えるのだろうか。そして、どのように口承民具に内包された意思を繋いでいくのだろうか。稲取という地域に足を置いて、つるし飾りという口承民具の今後を稲取の人々と共に模索する機会を得ていきたい。

謝辞

本稿をまとめるにあたり、聞き書きにご協力頂いた森幸枝さん、森年永さん、小野妙子さん、鈴島節子さん、村木友香さんに大変お世話になりました。稲取温泉観光協会所属の八巻文恵さん（１９６４年生まれ）には、つるし飾りに携わる方々の紹介や資料の提供など、調査の至る所で便宜をはかって頂きました。コロナ禍での実地調査であったにも関わらず、調査にご協力頂きありがとうございました。

また、本稿をまとめるきっかけとなったのは、「どうか孫が長生きできますように」との願いが込められた祖母（伊豆在住）のつるし飾りです。筆者にとって、毎年当たり前のように上巳の節句に飾られる民具であるからこそ、つるし飾りという口承民具を調査することができました。ここに記して感謝の意とさせて頂きます。（なお、本稿は実名・生年月日表記の快諾を頂いております）

註・参考文献

1 「日本三大つるし飾り」という名称は、2009（平成 21）年に「日本三大つるし飾りサミット」（第 4 章にて記載）にて付けられたものである。

2 本稿で用いる「常民」は、柳田國男が示す「木地屋とか毛坊主のような農業以外の仕事に携わる人をはずした農業の内側にある人々」ではなく、渋沢敬三が示す「家に居る女や子供たち」を含む「コモンピープル」に該当する。宮本常一（1980）『民具学の提唱』（未来社）（44-45 頁）

3 この語をはじめて提唱したのは渋沢敬三で、1933（昭和 8）年から 34 年にかけての時期である。1937（昭和 12）年『民具問答集』に「民具蒐集調査要目」を付し、そこで渋沢敬三は民具を「我々同胞が日常生活の必要から技術的に造り出した身辺卑近の道具」と定義した。民具という語の語感からしてそれは衣食住・生業の用具だけのような印象を与えるが、実際は生活全般にわたるもので、人々が生活の必要から製作・使用してきた伝承的な器具・造形物の一切を含むものである。
福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（2001）『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館）（634-635 頁）

4 松田佳代子「ツルシの民俗 - 伊豆稲取の「雛のつるし飾り」-」山崎裕子編（2009）『雛の吊るし飾り』（三弥生書店）（29-52 頁）

5 三原信子「つるし飾りについての考察：雛のつるし飾りの復活と今後」東京家政大学博物館（2009）『東京家政大学博物館紀要』（14）（133-149 頁）・三原信子「つるし飾りについての考察：実践編」東京家政大学博物館（2011）『東京家政大学博物館紀要』（16）（13-184 頁）

6 坂元一光「ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸活動 - 柳川さげもん調査予報 -」九州大学（2010）『九州大学大学院教育学研究紀要』（13）（61-75 頁）・坂元一光「柳川さげもん民族誌 - 手芸コミュニティと民俗技術の創造的継承 -」九州大学（2019）『九州大学大学院教育学研究紀要』（21）（1-23 頁）・坂元一光「子どもの民俗行事と地域の活性 - 柳川の観光ひな祭りと女性の「さげもん」細工 -」九州大学（2009）『国際教育文化研究』（9）（39-49 頁）・坂元一光「伝統を創造する女性たち - 酒田の傘福復興事業と地域学 / 地元学 -」九州大学（2012）『国際教育文化研究』（12）（1-15 頁）・坂元一光「伝統の創造と地域学 - 平成傘福物語 -」九州大学（2013）『国際教育文化研究』（13）（199-212 頁）

7 白石直樹「柳川の雛祭りと「さげもん」」山崎裕子編（2006）『雛の吊るし飾り』（三弥生書店）（53-62 頁）

8 藤田順子（2001）『お雛様をたずねて 各地で見られる雛と受け継ぐ心』（JTB）

9 宮本常一（1980）『民具学の提唱』（未来社）

10 注 7 と同じ（11 頁）

11 丸山泰明（2013）『渋沢敬三と今和次郎 博物館的想像力の近代』（青弓社）（90 頁）

12 注 11 と同じ（129 頁）

13 1937（昭和 12）年『民具問答集』に付けられた「民具蒐集調査要目」による民具分類項目は、（1）衣食住に関するもの（2）生業に関するもの（3）通信・運搬に関するもの（4）団体生活に関するもの（5）儀礼に関するもの（6）信仰・行事に関するもの（7）娯楽・遊技に関するもの（8）玩具・縁起物など、生活文化の全分野にわたる器具・造形物をあげている。これに基づくと、つるし細工は（5）（6）（8）にわたる民具であると考えられる。
福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（2001）『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館）（634-635）

14 注 4 と同じ

15 注 5 と同じ

16 大島建彦「雛節句とつるし飾り」山崎裕子編（2009）『雛の吊るし飾り』（三弥生書店）（21 頁）

17 伊豆稲取 雛のつるし飾り（絹の会作成パンフレット）

18 稲取では、毎年 1 月 14 日朝 8 時に点火される。

19 注 17 と同じ

20 坂元一光「ひな祭り行事の再構築と女性の手工芸活動 - 柳川さげもん調査予報 -」九州大学（2010）『九州大学大学院教育学研究紀要』（13）（61-75 頁）

21 坂元一光「柳川さげもん民族誌 - 手芸コミュニティと民俗技術の創造的継承 -」九州大学（2019）『九州大学大学院教育学研究紀要』（21）（1-23 頁）

22 大島建彦「雛節句とつるし飾り」山崎裕子編（2009）『雛の吊るし飾り』（三弥生書店）（23 頁）

23　注 7 と同じ（53 頁）
24　坂元一光「伝統を創造する女性たち - 酒田の傘福復興事業と地域学 / 地元学 -」九州大学（2012）『国際教育文化研究』（12）（1-15 頁）
25　山形県庁 / ホーム / 県政情報 / 山形県の紹介 / 山形県について / 庄内地域の紹介
（https://www.pref.yamagata.jp/337001/kensei/shoukai/yamagataken/shonai.html）
（閲覧日：2021 年 9 月 10 日）
26　坂元一光「伝統の創造と地域学 - 平成傘福物語 -」九州大学（2013）『国際教育文化研究』（13）（199-212 頁）
27　松田香代子は、「桃やサルッコのような細工もの一つ一つをさす言葉ではなく、ツルシという言葉を民俗的な総称として採用」している。注 4 と同じ（34 頁）
28　注 4 と同じ（43 頁）
29　松本市立博物館編（2005）『七夕と人形』（郷土出版社）
30　岩井宏實・工藤員功・中村啓治（2018）『民具の事典』（河出書房新社）（406 頁）
31　三国信一（2021）「新潟県胎内市中村浜の七夕飾り」神奈川大学日本常民文化研究所『民具マンスリー』（54）（6）（15-20 頁）
32　西尾実・岩淵悦太郎・水谷静夫・柏野和佳子・星野和子・丸山直子（2019）『岩波国語辞典 第 8 版』（岩波書店）（1029 頁）
33　沖森卓也・中村幸弘（2018）『ベネッセ表現読解国語辞典』（大日本印刷株会社）（827 頁）
34　影山輝國・伊藤文生・山田俊雄・戸川芳郎（2012）『新明解現代漢和辞典』（三省堂）（229 頁）
35　注 4 と同じ
36　絹の会の加入者は活動開始当初 10 人程であったが、現在は 8 人となっている。
37　注 20 と同じ
38　「さげもんめぐり」とは、「おひな様始祭」「柳川きもの日和」「おひなさま水上パレード」などの催しを通して、市内各所に展示されたさげもんを見ることができる観光形態である。
（柳川公式ウェブサイト /2021 年 柳川雛祭り “ さげもんめぐり ”）
（https://www.city.yanagawa.fukuoka.jp/kanko/meisho/meguru/sagemonmeguri.html）
（閲覧日：2021 年 8 月 31 日）
39　坂元一光「子どもの民俗行事と地域の活性 - 柳川の観光ひな祭りと女性の「さげもん」細工 -」九州大学（2009）『国際教育文化研究』（9）（39-49 頁）
40　「庄内ひな街道」とは、山形県庄内地方の家々に代々受け継がれてきたおひな様たちを、そぞろ歩きながら見ることができる観光形態である。
（庄内ひな街道（観光スポット・イベント情報：JR 東日本））（https://sightseeing.jrnets.co.jp/detail/arcv/36.html）
（閲覧日：2021 年 6 月 4 日）
41　注 20 と同じ
42　「雛の館」は稲取温泉旅館協同組合が運営する常設展示場である。
43　第 1 回主催は稲取温泉観光協会であった。
44　「民芸」とは、1925（大正 14）年に柳宗悦によって定義された造語である。名もなき民衆が、その生活のために造った工芸品であり、そこには貴族のための豪華な美術や、天才が独創した名品よりも、もっとすぐれた美があると考えた。民具の方はその機能性・実用性をもって評価するのであるが、民芸の方は機能性・実用性よりも造形的な美を発見し、工芸的価値の方を積極的に評価し、民衆工芸として暮らしの中に取り入れようとするものである。
福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（2001）『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館）（636,638 頁）
45　山崎明子「手芸と技術―つくることに与えられた社会的意味」（2020）『現代手芸考』（フィルムアート社）（30-36 頁）
46　福田アジオ・新谷尚紀・湯川洋司・神田より子・中込睦子・渡邊欣雄（2001）『日本民俗大辞典 下』（吉川弘文館）（634-635 頁）